



「ロシア革命十周年記念祭」ポスター

作業を行う我々は、新太郎先生を「収集家」と呼んでいるが、学習院女子大学で近代日本文学を教えていた高橋新太郎を知る人からは、「先生は収集家ではなく研究者である」と叱られる。「研究のために必要となるであろう本や雑誌をとりあえず収集していたのである」と説明を受ける。しかし、それを理解したとしても、段ボール約二千五百箱に詰め替えた膨大な書籍や文献（この中には古新聞や切抜き、ポスター・チラシ類も含まれる）は、「近代文学」など既成のジャンルで区分・整理することは困難で、本人亡きいまは「集めていた」としか表現のしようがないものである。

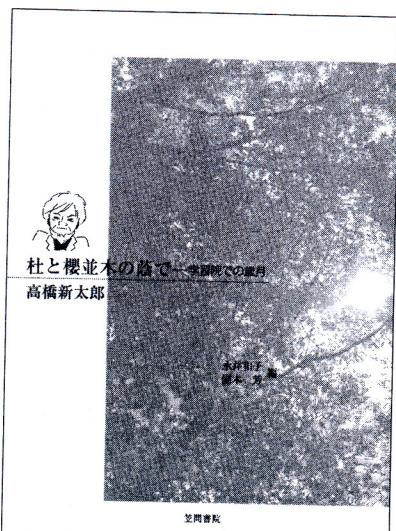
医師から余命わずかとの宣告を受けた新太郎先生は、残された命として「あと三百日欲しい」と言った。その日数で最後の卒業生を送り出し定年退任を迎える、三作の本を仕上げたいと周

囲に語った。ひとつは随想集『杜と櫻並木の蔭で』であり、これは本人の原稿と学習院を中心とした関係者の方々に追悼文を執筆していただき、今年七月、学習院女子大学教授・永井和子氏と園木芳氏の編集により笠間書院から出版された（『杜と櫻並木の蔭で』は非売品として出版されているが、ご希望の方には頒布しているので、笠間書院または高橋文庫までご連絡を）。

そして生前果たせなかつた残りの二作は、ひとつは研究論文集『近代日本文学の周囲』であり、もうひとつが、おそらく収集した書籍や文献をもとに構成されたであろう『昭和貼交帖・思想と文化の相克』である。後者は、新太郎先生の膨大な蔵書・文献・図版類の中から、高橋新太郎自身が必要なもの抽出し、それを意味付けし、世の中に提示するもののはずだった。本人からその構想を聞かされた方の話によれば、膨大な蔵書・文献・図版類をもとに、「それを鳥瞰図的に昭和の意味を根源的に問い合わせるはずだった」という。

けれども新太郎先生は、「第一頁に（ロシア革命十周年記念祭）のポスター」というメモのほかは、一行の原稿も、整理軸も残さぬままに逝った。

「高橋新太郎文庫」の取り組みは、「何を集めていたのか」を記録するだけの作業である。けれども、新太郎先生が遺したかった「昭和貼交帖」を誰かが引き受けくれるときの「引継ぎ書」のひとつにはなるはずだと考え、遺族の理解に甘え、さらにお族に大きな負担を強いながら継続している。



1983年5月の高橋新太郎氏（撮影・高田淳）とその写真が収められた『杜と櫻並木の蔭で—学習院での歳月』高橋新太郎著、永井和子・園木芳編、笠間書院、2004年、非売品。

ところにあった。『彷書月刊』の読者であればご存知の通り、高橋新太郎は全国の古書店をまわり、さまざまなジャンルの書籍や文献を収集した。そして、それ以上に膨大な新刊書籍・雑誌を書店から買い求めていた。

新太郎先生の周囲の者で、文学や研究や古書収集に縁のない者たちは、「ただ処分するのは惜しい」という思いから、新太郎先生の長女・芳さんと、その夫君である園木章夫氏に蔵書の整理を申し入れた。

当初、半年間で整理し、書名程度の目録を作成し、それをインターネット上に掲載しようという考えでスタートした。「何を集めていたか」だけでも記録されれば、後は寄贈や古書店を介しての市場への還元、あるいは廃棄といったさまざまな選択肢のどれを選ぶこともできるだろうと判断した。しかしこの判断は、いかにも素人のそれであることがやがて判明する。蔵書の収容と整理作業は、日本橋人形町にある園木氏の経営する会社のビルの一室（「フロア占拠！」）を利用して、作業後一年八ヶ月を経過した今でも蔵書リスト作成は遅々として進まず、関係者は「途方にくれている」状態である。整理状況および雑誌創刊号や全集など一部のリストはホームページをご覧いただきたい。また遅々として進まぬリスト化を補うために、『彷書月刊』に連載された本人の集書をもとにした連載「集書日誌」も、収録した。整理後の処置については、正直「手付かずのまま」である。処置に関する、現実的で好意ある提案を求めてやまない。